

埋もれた婦人「革命前夜」に賭けた友A 運動家③



共産党リンチ事件の現場にいた女性筆者の現夫君のハウススキーパーであり弾圧厳しくスパイの横行激しい疑心暗鬼の時代を毅然と潜りぬけた人であった

はじめに

戦後の憲法は言論・思想の自由を建前としては認めているが実質は保障されていない。したがってここに登場する人が四十年前の若い日、革命運動のなかでの強烈な事件に連座した経歴が明らかにされると、本人の生活の基盤である職場を失うかもしれないし、肉親まで迷惑するかもしれない。そのようなおそれからこの記録では主人公の名は伏せた。いつの日か、公然と本名で語る日の来ることを願ひながら、読者のご理解を得たい。

きれいなお嬢さま

先生の作品を愛読しております。伊太利のファシズムを主題にお書きになったものに最も感心いたしました。もっと伺わせてほしいのですけれど、そういう娘が何を聞こうとするのかも見当がつかない。対の大島を着て、白粉気もなく、整った顔に澄んだ目を輝かし、歯切れのよい言葉でてきぱき物を言う。書をよく訪ねて来る作家志望者や愛読者にはない、つつましかた、理智的な美しさに

杉野は好感をもつて、滞伊中の見聞を話した。伊太利の話の終るのを待ち兼ねたような問い方に、軽く大変ですねと笑い、相手の真意を探ろうとして、杉野はわざととぼけた。

「日本のファッショ化って、そんなに非道いんですか」

娘はまくしたてるように話した。満洲事変以来国をあげて暴風のように……すること、共産党に弾圧……留置場……党の資金網の破壊されたこと、銀行ギャンブル事件以後、党に対する大衆の疑惑……この娘は一体何をい出すか？ 杉野は

「……この娘は一体何をい出すか？ 杉野は」

「……この娘は一体何をい出すか？ 杉野は」

「……この娘は一体何をい出すか？ 杉野は」

「……この娘は一体何をい出すか？ 杉野は」

「……この娘は一体何をい出すか？ 杉野は」

「……この娘は一体何をい出すか？ 杉野は」

「……この娘は一体何をい出すか？ 杉野は」

牧瀬菊枝

(評論家)

なおしてからはただ大空を仰いで無為に生きているのでも仕合せである。ましてわが書く小説を待つていてくれる読者もある……危険を冒すことはできない。生きて社会を長く見とどけよう。その小説もあるいは貴方には無益なことと考えられようが、それでも、こんな時代の一記録となるかもしれない。只反動にならぬこと、貴方を妨げぬこと、それのみがこの暴風を正しく生きぬけるために、病弱の己の探るべき態度のように思われる。

「……やパンフレットは来ておりますか、お届けしましょうか」

「読まなくてもいいのです。臆病者だと笑って下さい」

うなだれて聞いていたが、そつとハンカチを目にあってから、娘は急に杉野の話を遮り、きつぱり告げた。しかし杉野の返事に再びおれ涙をこらえきれないような様子だった。泣くことがあるだろう。か。もつと明らかに己の目的の誤ったことを笑って帰ってくれないであろうか。杉野は同じ姿勢を崩さない娘の弱々しい肩の線を沁みみた。ドアをあけて戸

口を示さずえすればいいのだが、美しい娘が……投げてだしていることに数度気もして躊躇している間に好奇心がむらむら昂ぶり、続いて何をいい出すか、どんな表情の陰影もみのがすまいと敏く観察はじめた自分をどうすることもできなかった。

ノックの音がする。娘は急いで涙を拭い、歪んだ笑顔を顔一杯にして、明らかな声をあげ、

「色々外国のお話、愉快でしたわ」と言った。

「あなたは何かもわかってらっしゃる——でも時代が悪いんですわね、私の参りましたこと、もちろん二人きりのことにして、忘れてしまつて下さるでしょう？」

杉野はうなずいて立ち上り、玄関へ送って出た。(中略)その後第五次共産党検挙を報ずる新聞に「目の鋭い娘」の写真を見出してから(妻は)夫を憎むようにさへ変って行った。

「そんなこといって、あの娘は松井菊子といった上(中略)妻芳枝は「私、精も根もつきてしましました。数年看病したあげくに、また危い橋を渡りそうになるあなたを擁へていなくてはならないなんて——(以下略)田代ナを新カチに改めた。井沢光治良作「橋の手前」(昭和八年四月号)」

これは「橋の手前」の抄録である。作者とおぼしき作家杉野の家に、党資金をもらいに来た美しい娘、松井菊子(小説上の名)は私の友人Aである。A自らそのことを私に語った。対の大島も私には見覚えがあるし、歯切れのいいコトバつきなど彼女の姿をかなり正

確に描写している。小説全体から推すと、昭和七年十月六日のいわゆる共産党の銀行ギャンブル事件の直後、十一月のことらしい。伏字を私なりに埋めれば「党のために命を投げ出している美しい娘」とはどんな人か。その生立ちから始めよう。

父は農林省の高級官吏、徹底した天皇主義者で、画家の伯父が書いた教育勸語の掛軸があり、子どもたちはその前に並び、年上から順に「朕惟うに我が皇祖祖宗……」と暗誦させられ、それが終わらないと朝食は食べられない。母は旧藩の家老の娘で、子どものころは家庭教師がついて勉強していたということ、中学生の英語を教える力があり、父とは違つて偏見のない人で、「改造」「中央公論」を子どもたちと一緒に読んだ。のちに息子や娘が検挙され、母の家へも家宅捜索が来たと、母は写真や手紙類など証拠になるものを匿すのに、ぬかみそ桶の底が五、六センチ揚げ底になっていところへぎつしり詰めたり、蒸釜の底の水を入れる部分へ写真を詰めて、上にご飯を入れておいた。便壺まで調べる警察も、ぬかみそ桶の裏底や、ご飯蒸器の底までは気がつかない。このような知恵で母

は子どもたちを守った。十二も年上の父と結婚し、八人の子を生んだ。Aは七番目に明治四十三年仙台で生まれた。花柳界で父はもてたらしく、女の問題で母はいつも泣かされていた。「表面謹厳な天皇主義者の家庭の裏面はかくも乱脈を極めたもの」とAはいふ。

長兄は早稲田大学に学び、仙台のアナキストの草分けで、大杉栄、伊藤野枝も兄を頼つて仙台へ来たりした。三男の兄は第一回普通選挙のさい、労働党を表面に立てて共産党が裏で指導したとき、東北大学の学生としてピラ張りなどやって検挙された。兄は「資本論」、ジョン・リードの『世界を震撼させた十日間』、小林多喜二の小説など禁書の本をミカン箱に詰めていたが、Aの思想的めざめには手を貸さなかった。「どうしようもないプチブル娘!」と思つて、共産党の非法機関誌『赤旗』や『無産者新聞』をみせてもくれないのでAはひとりやんでいった。何もせずに生きていけるよりは自殺すべきではないかと真剣に考えていた。県立女子専門学校の英文科を出た年、藤沢恒夫の小説「少年」を『改造』(昭和六年九月号)で読んで、本ばかり読んでいても、組織につながなければ何もできない

いことを学んだ。

まず、そのころ始まったプロレタリア・エスペラントに入り、当時のコトバでいえば、覚員として「獲得」された。そのころの流行語モダンガールの尖端をゆくAは断髪洋装であった。P・P(プロレタリア美術)、P・M(プロレタリア音楽)、プロット(プロレタリア演劇)などが続々生まれたところでAはプロットの仙台支部の劇団「さつき」に入り、シユブレヒコールを習ったりして、農村を回る移動演劇団に加わった。非合法活動家のための読書会「ロンド」にも入った。登米郡などの農民運動も手伝って、立入禁止反対闘争にも参加した。片倉製糸の女工を獲得するため、もめんの着物を母につくらせ、断髪につけまげ姿で工作したりした。狭い仙台ではAの活動はめだち過ぎ、もはや危険であった。

上京して、完全な地下生活の党活動に入った。

資金局自由職業班

Aは当時、資金局の自由職業班に属し、作家や大学教授から党資金をもらう役で、菊池寛、尾崎士郎、橋爪健などの家を訪問して歩

いた。さきに引用した小説「橋の手前」はその任務で芹沢光治良宅を訪ねたときのことである。某作家は「そんなに党のために生命を賭して働くなら、女給になったらいいでしょう」といった。Aが美しい娘だからだろう。某作家は、さんさんしゃべらせておいてから、「君、かわいいね。晩ご飯くらいご馳走しよう」といってご飯だけ食べさせてくれた。党資金を出したことがわかれば、必ず検挙された時代である。

軍艦内に細胞

党は「革命前夜」という判断から、そのころは軍事部を設け、軍人向けの新聞「兵士の友」を昭和七年には発行し、陸海軍に組織づくりを始めた。「社会運動の状況」には「海軍は横須賀三名、呉十名」とある。Aの弟は旧制高校の入試準備の浪人中に徴兵適齢になったから、それならいっそ海軍に入って組織をつくらうということになった。理論の勉強はしていても、実践の体験のない弟が、特にきびしい軍艦内で組織者になるのは、どんなにつらかったことか。しかし弟はこの困難に耐え、軍艦「山城」の水兵三人を組織した。

危険を冒して、姉が弟への面会というかたちで軍艦に「赤旗」を届けに通った。ところが艦内で盗難さわぎがあり、所持品一斉検査で、匿していた「赤旗」がバレた。「軍艦内に赤の細胞」として、この事件は世間を震撼させた。海軍刑務所で弟たちは言語に絶する酷刑を受けた。一般の刑務所とは比較にならない刑罰を受ける者の苦痛はいうまでもないが、木風呂などのむごい刑を与える係官のほうに、あまりの残酷さに泣いたという。度々の息子、娘の検挙の上に、帝国海軍軍人たる末子までが「赤」で検挙された。天皇主義者の激怒が思いやられる。

拷問に耐えて

昭和七年春、Aは神田通りで特高に呼びとめられた。「赤旗」をたくさん持っていたから、必要で逃げ出したが、もはや逃げきれなくなり、観念したAは、持っていた「赤旗」をバツと路ゆく人に向けて投げ出し「みなさん、読んで下さい!!」と絶叫した。手錠がかかり、ハンドバックは飛び、コンバクトや口紅が散らばった。日大の学生が拾い集めてくれた。錦町署の拷問はひどかった。名前さえ黙

否していわないからテロは凄惨を極めた。初

めはベンを指の間に挟んでこじるが、次は裸にして逆さ吊りし、六尺の六角棒をビンビンいわせて後から連打すると気絶する。気絶したとみるや水をぶっかけて、またビンビンやる。太腿は二倍にも脹れ上り、また気絶する。何度気絶したかわからない。本庁から来た蒲生という特高が一番すごいテロをやった。留置場では慣れている同志のKが待ちかまえていて、「ほら、また一人来た!!」といて、用意してある洗面器の水で冷やしたり、看護してくれた。当時の警察のテロは言語に絶するもので、ことに女性に対しては恥しらずな暴虐をあえてした。

Aが、名前さえ黙否してがんばれたのは、上部の伊豆公夫(歴史学者)からかねて教えられたことを守ったからだという。

「一週間は絶対黙否すること。最初の一週間を第一線として、どんなにしても守らなければならぬ。テロでちよつぱりハク(自白)と、テロはますますひどくなる。一歩後退してずるになる。攻撃は強まるばかりだから、最初の第一線、一週間の完全黙否を守りぬくこと。この教え通り一週間、名

前もいわずがんばった。そのうち上部が全部しゃべってしまったから、「もうお前がいわなくても、この通り全部わかってる!!」といわれて、もはや仕方なくそれを認めることになる。Aはいう。

「自分も含めて、あのころは下部の若い人たちはほど気負っていました。気負っていたからこそ、あの残酷なテロにも耐えられたのです。同じ署で取調べを受けていた中学生は、いわなければいいのと思うのに、『ぼくは共産党員です!!』と気負っているのです。かわいそうなほどみな若い人は気負って、ひたむきに信じていたのです。それを上部が先にハクのですから、ひどい状況でした。中央部に大物スパイの潜入していた末期的状況を知らず、二十歳前後の若者はみなひたむきに信じていたのだった。

留置場に半年暮らしたが、その時は書類送検だけで釈放された。帰宅するとすぐ、また非合法組織につながった。

「その前から党上部にスパイがいることはうすうす感じてました。上部に出す履歴書に本籍地から出身学校まで書けという、へんな要求が出たが、その通り出していたのだから、

当局には何もかもわかっていたはず」とAはいう。下部の覚員は生活費に窮していた。

一日中連絡から連絡に歩きまわるから、下駄はすぐにチビてしまふ。膝から下の脛はほこりで黒い靴下をはいたように真黒になり、夜になって足を拭くと雑巾は真黒になった。

先の検挙では不審訊問で捕まったのだが、そのとき特高は「チビた下駄がまず怪しいと睨んだ」といった。それなのに連絡で会う上部の人は札ビラを切り、夏はバリツとした麻の服を着ている。信じきっているAはそれは当局の目をくらますカムフラージュだと善意に解釈していた。若い下部の覚員が苦心して集める党資金を上部にいるスパイはこのような豪華な生活に勝手に使っていたのだらう。党上部にスパイのいることがいよいよはっきりして、スパイ査問が昭和八年十二月から九年二月にかけて数カ所で行なわれ、その一つの査問では殺人まで行なわれた。これらが世にいう「共産党のリンチ事件」である。この事件の検挙によって党中央委員会は潰滅した。

リンチ事件のアジトで

昭和八年一月、Aは上部の命令でスパイ査

問のためのアジトを用意することになり、同じ役割を与えられた東大生と池袋に小さな貸家を見つけ、サラリーマン夫婦のかたちで住み、そこへスパイと疑われた男がつれて来られ、査問は上部の数人が来て行なう。男は紐でしばられて押入れに入れてある。Aはご飯を炊き、おむすびをつくり佃煮をそえて与えるのだが、上部の人たちは小さなおむすびでいいという。Aは「私は女ですし、とてもそんなひどいことはできませんから、大きなおむすびをつくってやっていました。あとで公判廷での尋問に対して、その男は『Aさんのつくってくれたおむすびは大きかった。Aさんには感謝する』と言いました」という。その男が便所に行く時はAと東大生はピストル（ロイヤル八連発拳銃）をもってつれてゆく。非合法だから本名はわからないが、「首切り茂左衛門」というあだ名の人が査問の中心、ほかに三、四人が加わった。畳を上げ、床板をはずした土の上に、その男を裸で立たせ、ピストルを持って責めながら拷問する。雪の降る寒い一月半ばかり、男は痛さ寒さにヒューヒューいう。Aはこの声をきくのは耐えがたい。この悲鳴が外へ洩れないように東大生は

ボーダブルの蓄音機をかける。パッハの「リア」だった。Aは掃除をしているふうにはタバタとハタキの音をさせていた。一度巡査が来たが、Aが応対に出てうまく撃退できた。外から来る外部との連絡のために「変りなし」という合図のしるしに窓に花を出して置るか、家まで来る途中の電柱にバット（タバコ）の銀紙を挟んで置いたりした。結局、この男はスパイではないとわかって、最後に男の額に硫酸で焼印を付け、二月十七日早朝釈放した。アジトは直ちに解散、Aは新しい任務についた。Aは語る。「私にとつては、この事件があんまり強烈なもので、ほかの活動については時間の前後などみなぼうつとなつて、印象が弱くなり、記憶もたしかでありません。ほんとうにあの事件は私にとってはショックでした」。

だが震える。人間てなんて弱いものだろうと思ひました。テロが始まるまではブルブル震えていて、自分でとめようとしてもとまらないほどひどく震えているのに、いよいよテロが始まってしまうと覚悟ができるんでしようね。なんともなくなり、耐えていけるんです。本庁から有名な野中という凄腕特高が来て、すぐくテロられました」。

この事件関係ではAは最後に捕まった。本庁ではすべてはわかつていてから、前の検査のテロのように長い期間のテロではなく、短期間のテロだった。短いだけに猛烈なテロだった。

警察から市ヶ谷の未決監にゆくとAは寝る間も惜しんで勉強した。一つ隔てた房にいた女の同志が腰紐を窓に下げて首吊り自殺した。看守たちがどやどや入って来て、大騒ぎになった。この人はスパイとは知らずに、同志と信じてハウスキーパーとなつていた人が、査問にかけられ、リンチのため死んだ。そのショックで自殺したのだ。それ以来独房の点検はきびしくなったが、Aの房の前へ来ると、「こいつはいい!!」という。自殺の心配はないというわけである。それほどAは未決

監では元気いっぱい過ぎて過した。

未決監に半年いて保釈となり、「今後、運動はしません」という、そのころのコトバでいう偽装転向で、判決は懲役二年（執行猶予四年）の刑であった。

組織内で知りあった同志と結婚し、共働きをするうち、夫は敗戦の年の四月、「横浜事件」で検挙された。中央公論社、改造社、岩波書店、日本評論社の編集者三十余人余が投獄された、神奈川県特高のデッチあげによる言論界への弾圧事件である。残酷な拷問により獄死者も出たが、夫は戦後、釈放され、組合づくりを始めた。

子どものないAは婦人組織のめだたない片隅で働きはじめた。ところが夫は、自分が育てた労働組合の若い娘と恋に落ち、妻を捨てた。そのショックで一時は病気になる、活動から身を引いた。

それ以後は前歴をかくして入ったじみな職場で働き、アパートの一室で一人暮らしをしている。六十すぎとは思えない若い笑顔は今でも美しく、すこしのかげりもない。

退路を断つて

「ひたむきにやってきて、何度も検挙され、どんな拷問にあつても、この運動をやめようとは思わなかったですね。革命の前夜と信じきって、身命を賭してやって来ましたが」とAはいう。

大地主や高級官吏、医者など富裕な最高エリートの人たちである当時の女子学生は、今の学生とは比較にならない特権階級の出であつた。その特権の座をふり捨てて、しいたげられた階級の解放のため、革命の一兵卒として生きるほか生きようはないと、まっしぐらに生きてきた。しかし多くの娘たちは検挙されると親の手に渡され、監禁同様に、思想の自由を圧殺され、結婚へ屈服した。当時の評論家大森義太郎はこういう良家の左翼女子学生を「退路を断たれていない」と評した。そういう左翼お嬢さん中ではAは退路を断ち切つて生きぬいた数少ない一人である。

離婚した時は三十七、八歳だった。怖れを知らぬ大胆な行動力と戦前の体験からすれば、彼女が望みさえすれば、戦後の合法組織の有利なポストが得られただろう。しかし彼女はそういう晴れがましい座には一度も上がらなかった。いつも下積みの仕事を選んだ。これ

は極度の非合法生活しか知らない昭和七、八年ごろの女性活動家の一つのタイプかもしれない。彼女は安定したポストも、安定した結婚も両方とも拒否した。計算にたけた人は彼女の計算のなさを笑うかもしれない。革命が敵階級との食うか食われるかのたたかいである以上、戦術としては計算は必要だろう。しかし革命の一兵卒として生きようとする人が、私生活のうえで世俗の安穩のための計算に身をゆだねるとき、特権階級出身の彼女に何がおこるか。一歩後退は退廃への道を限りなくすり落ちることになるのではないか。名もない庶民ばかりの職場に身をおき、つましい木造アパートの住人たちと哀歓をともにすることで、一度ふり捨てた特権階級への逆戻りを自らに厳しく戒めているのだ。「革命のために身を投げ出している」彼女を芹沢氏は「敬虔」と感じた。まさに敬虔ともいえるこのような若者たちの血の犠牲にささえられなければ、どんな時代のどの革命も成就しなかったのだ。ファシズムの嵐吹き荒れる戦中から今日までの三十年、私はAのこのような生き方にささえられ、からくも生きてこれたのだ。

(一九七二年一月)